

世變經成立年代考補遺

菊 地 章 太

本稿は『東洋学研究』56号に発表した拙稿「世變經成立年代考」の補遺をなすものである。『世變經』つぶさには『般泥洹後比丘世變經』の本文を伝える敦煌写本の転写、ならびに『世變經』を異本と対抗して作成した校訂本文とそれにもとづく現代語訳である。以上の作業を踏まえつつ、最後に中国南北朝時代における弥勒信仰の変質とその後の展開のありようについて概観を試みたい。

1. 写本転写

凡例

1. 敦煌写本スタイン2109番のうち『世變經』の該当箇所を転写した。
1. 写本全体の行番号を最初に示し、『世變經』の行番号を〔 〕で示した。

- 147 [00] 佛説般泥洹後比丘十變經
148 [01] 佛言我般泥洹後百歲時吾諸弟子沙門忽
149 [02] 明智慧與我無異二百歲時阿育王從八國
150 [03] 王索八斛四斗舍利一日之中作八万四千
151 [04] 佛塔三百歲時若有出家作沙門者一日
152 [05] 之中便得道四百歲時所念佛及法與僧供養
153 [06] 和上阿闍梨五百歲時沙門婆羅門及一切
154 [07] 人民無不涕泣念佛者六百歲時諸沙門
155 [08] 便行入山樹下冢間求道七百歲時便行内外
156 [09] 學經若有沙門婆羅門問事無不能了悉懷
157 [10] 九十六種外道八百歲時便復行念作佛塔寺
158 [11] 九百歲時便復行治生求利吉諍處所千歲
159 [12] 時便行與國王相隨教習兵法戰陣自行屠
160 [13] 殺妻娶婦女安居基業千歲之後三百歲中
161 [14] 大亂哉矣衆患萬變切身意災人民俗盡時
162 [15] 當炎大水高廿五里漸諸名山滿十二年水
163 [16] 乃去所在無復有山其地平政樂不可言

- 164 [17] 然後月光童子乃出世耳但以般若波羅蜜
 165 [18] 教化人民得道者日有千百生天者不可數
 166 [19] 其時人民身長八尺壽百八十歲其時人民
 167 [20] 多食自然人民心但念道金寶不用衆聖側
 168 [21] 塞於世宮殿城郭皆用七寶法王治世五十
 169 [22] 一年便去自是以後法遂微末羅云於諸塔
 170 [23] 寺閒取舍利聚著一處然乃般泥洹龍王當
 171 [24] 取舍利去乃取十二部經於海中供養之是
 172 [25] 以大法盡矣
 173 [26] 後人當壽卅五十乃後時人々壽々五々歳々
 174 [27] 時无君王臣左當尔時三歳乃與今一歳等
 175 [28] 耳人欲盡時大海水通小海々沸地亦沸閻
 176 [29] 浮地當廣大平正弥勒佛乃下耳釋迦文佛
 177 [30] 弟子承用經法者皆在弥勒佛前諸沙門當
 178 [31] 有九十九億人隨龍中墮鬼神道不可數向
 179 [32] 地獄者如塵上生天者沙々耳其得道千億
 180 [33] 未有一乃當有沙門更墮地獄餓鬼^中畜生中
 181 [34] 更當白有衣而生天上千歳之後諸三昧
 182 [35] 尊經盡當到天竺北彼土人民亦當學之
 183 [36] 雖學尊經好相嫉妬隨俗因緣外揚清白内
 184 [37] 壞論諂既滅吾法自墮地獄痛哉可傷佛是
 185 [38] 經時在拘夷那竭國雙樹精舍賢者阿難及
 186 [39] 大衆人民皆歎息同言痛哉礼佛而去

2. 校訂本文

凡例

1. 敦煌写本スタイン 2109 番を底本 (a) とし、大正新修大藏經本『仏母般泥洹經』に附載された「般泥洹後變記」(b) をもって対校した。
1. 略字や俗字をふくめ異体字はすべて通用の文字に改めた。
1. 誤写と思われる文字の訂正を含め、底本を改めた場合はその根拠を校異に示した。

佛説般泥洹後比丘世⁽¹⁾變經

佛言。我般泥洹後百歳時⁽²⁾。我⁽³⁾諸弟子沙門聰⁽⁴⁾明智慧與⁽⁵⁾我無異⁽⁶⁾。二百歳時。阿育王從八國⁽⁷⁾王。索八斛四斗舍利。一日之⁽⁸⁾中作八萬四千佛塔⁽⁹⁾。三百歳時。若有出家作沙門者⁽¹⁰⁾。一日之⁽¹¹⁾中便得道。四百歳時⁽¹²⁾。所⁽¹³⁾念佛及法與僧⁽¹⁴⁾。供養和上阿闍

梨。五百歳時。沙門婆羅門及一切⁽¹⁵⁾ 人民。無不涕⁽¹⁶⁾ 泣念佛者。六百歳時。諸沙門便行入山⁽¹⁷⁾。樹下塚間求道。七百歳時⁽¹⁸⁾。便行内外學經。若有沙門婆羅門問事無不能⁽¹⁹⁾ 了。悉壞⁽²⁰⁾ 九十六種外⁽²¹⁾ 道。八百歳時。便復行念⁽²²⁾ 作佛塔寺⁽²³⁾。九百歳時。便復⁽²⁴⁾ 行治生求利⁽²⁵⁾。吉諍⁽²⁶⁾ 處所。千歳時。便行與國王相隨教習兵法戰陣⁽²⁷⁾。自行屠殺。妻娶婦女⁽²⁸⁾。安居基業。千歳之後三百歳中。大亂哉矣。衆患萬變。切身意災。人民欲⁽²⁹⁾ 盡時。當來⁽³⁰⁾ 大水。高二十⁽³¹⁾ 五里。漸諸名山。滿十二年。水乃去所在。無復有山。其地平整⁽³²⁾。樂不可言。

然後月光童子乃出世耳。但以般若波羅蜜。教化人民。得道者日有千百。生天者不可數。其時人民。身長八尺。壽百八十歳。其時人民。多食自然。人民心但念道。金寶不用。衆聖則⁽³³⁾ 塞於世。宮殿城郭。皆用七寶。法王治世五十一年便去。自是以後。法遂微末。羅云於諸塔寺間。取舍利聚著一處。然乃般泥洹龍王。當取舍利去乃。取十二部經。於海中供養之。是以大法盡矣。

後人當壽四十⁽³⁴⁾ 五十乃後時。人壽五歳。人壽五歳⁽³⁵⁾ 時。無君王臣民⁽³⁶⁾。當爾時三歳。乃與今一歳等耳。人欲盡時。大海水通小海。海沸地亦沸。閻浮地當廣大平整⁽³⁷⁾。彌勒佛乃下耳。釋迦文佛弟子。承用經法者。皆在彌勒佛前。諸沙門當有九十九億人隨龍中。墮鬼神道不可數。向地獄者如塵。上生天者如沙⁽³⁸⁾ 耳。其得道千億未有一。乃當有沙門更墮地獄餓鬼⁽³⁹⁾ 畜生中。更當有白⁽⁴⁰⁾ 衣而生天上。

千歳之後。諸三昧尊經盡。當到天竺北。彼土人民。亦當學之。雖學尊經。好相嫉妬⁽⁴¹⁾。隨俗因緣。外揚清白。内壞論諂。既滅吾法。自墮地獄。痛哉可傷。

佛是經時。在拘夷那竭國雙樹精舍。賢者阿難及大衆人民皆歎息。同言痛哉。禮佛而去。

(1) a十(歴代経録の記載によって改める。『東洋学研究』56号所載「世変経成立年代考」参照)

(2) a時/b一 (3) a吾/b我 (4) a忽/b聽 (5) a與/b如 (6) b+我般泥洹後

(7) a國/b一 (8) a之/b一 (9) a佛塔寺/b佛圖 (10) a者/b一 (11) a之/b一

(12) a一/b時 (13) a所/b數 (14) a與僧/b以比丘僧 (15) a一切/b一 (16)

a涕/b啼 (17) a山/b山中 (18) a一/b時 (19) a能/b解 (20) a懷/b壞 (21)

a一/b外 (22) a行念/b念行 (23) a作佛塔寺/b作佛圖堞疾次作佛圖 (24) a復/b

念 (25) a利/b利害 (26) a吉諍/b一 (27) a陳/b陣 (28) b(以下欠) (29) a俗

(意によって改める。以下同様) (30) a炎 (31) a廿 (32) a政 (33) a側 (34) a卅

(35) a人々壽々五々歳々 (36) a左 (37) a正 (38) a沙々 (39) a餓鬼中 (40) a白有

(41) a妬

3. 現代語訳

凡例

1. 訳文は前項の校訂本文にもとづく試訳である。

1. [] 内の文字は筆者が補った。

「仏陀は言われた。『私が涅槃に入ってから百年後、弟子の出家者たちの優れた知恵は私と変わるところがない。二百年後、アショーカ王は八つの国の王たちから八石四斗の仏舍利を出させ、一日のうちに八万四千の仏塔を建立する⁽¹⁾。三百年後、こころごして出家する者があれば、一日のうちにたちまち真理にめざめるであろう。四百年後、仏陀とその教えと出家者を尊び、師に仕える。五百年後、出家者も修行者もあらゆる人々も、涙を流して仏陀を念じない者はない。六百年後、もろもろの出家者は修行すべくただちに山に入り、樹の下や墓場に座って真理を求める⁽²⁾。七百年後、たちまち仏陀の教えや外道の教えを学び、出家者や修行者に質問することがあれば、明らかに答えられないことはなく、九十六種の外道の教えをことごとく論破する。八百年後、なおもまた修行と念仏に励み、塔や寺院を建立するであろう。九百年後、[出家者たちは]生活のために利益を求めるようになり、俗世間の幸せを争って求めるようになる。千年後、国王に従って兵法を練り、戦闘の訓練をして殺戮さえ行なうようになる。妻をめとって定住し[子孫のために]稼ぎにうつつをぬかす。千三百年後には、世は大いに乱れる。人々は世の転変を憂え、災難を恐れるありさまである。人々がいなくなろうとするとき、大洪水が襲うであろう。波の高さは二十五里もあり、山々は呑みこまれてしまう。十二年たってようやく水は引き、そこかしこでもはや山々はなくなり、地面は真っ平らになって、往来しやすくなることこの上ない。

それからのち月光童子が世に現れ、ひたすら最高の知恵をもとに民を教えに導く⁽³⁾。真理にめざめる者は一日に百人千人もあり、天に生まれ変わる者は数知れない。そのとき人の身長は八尺になり、寿命は百八十歳に伸びる。そのとき人は食べ物に困ることなく、ひたすら心に仏陀を念じ、金銭も財宝もいらず、もろもろの清らかな人が世に満ちあふれる。宮殿や城郭はいずれも七宝でできている。教えの王[である月光童子]は五十一年のあいだ世を治めたあと、たちまち姿を消す。それからのち教えはまた衰えて消滅するだろう。羅雲はあちらこちらの寺院の塔から仏舍利を取り集めて来て一箇所にまとめる。それから般泥洹龍王がこの仏舍利を携えて世を去り、さらに仏陀の説いた経典をことごとく携えて海中にもたらし、そこで供養する⁽⁴⁾。こうして大いなる教えは地上から消え去るであろう。

いつか人の寿命は四、五十歳になり、さらにのちには五歳にまで減るであろう。のちの時代に人の寿命が五歳になったとき、王も臣下もいなくなり、そのときの三歳は、まさしく今の私たちの一歳と変わりがない。人々がいなくなろうとするとき、大海と湖沼とは混ざりあい、海水は沸き立ち、大地までも沸き立つ。この世界はどこまでも真っ平らに整うであろう⁽⁵⁾。そのとき弥勒が地上にくだる。釈迦仏陀の弟子として経典と教えをいただくとする者は、みな弥勒のもとに参集する。もろもろの出家者は九十九億人もいるのに、悪龍にそそのかされて鬼神道に墮ちる者は数知れない。地獄に墮ちる者は塵あくたの

ように多く、天に昇り生まれ変わる者はごくわずかである。真理にめざめようとこころざす者は、千億人に一人もないほどになる。出家者なのに地獄や餓鬼道や畜生道に墮ちる者がおり、かえって白衣をまとった〔在家の〕者こそがむしろ天に昇り生まれ変わるであろう⁽⁶⁾。

それからさらに千年を経たのち、真理へと導くもろもろの尊い經典は消え去り、インドの北方に到って、その地の人々がこれを学ぶであろう⁽⁷⁾。彼らは經典を学んで尊びはするが、おたがい憎しみあってばかりいる。俗世間のしがらみにこだわり、外見は潔癖を装うが、内心は教えにたがい、世におもねるありさまとなるであろう⁽⁸⁾。もはや私の教えも滅んで、みずから地獄に墮ちていく人ばかりなのは痛ましことだ。悲しむべきことである』と。

仏陀がこの經典を説かれたのは、クシナガラ国のサーラ樹の精舎におられたときであった。賢者阿難をはじめ多くの人々は、だれもみな嘆いてとども言うであろう。『痛ましいことだ』と。それから仏陀に礼拝して立ち去って行った』

4. 弥勒信仰の変質とその後の展開

梁の天監十七年(518)以前に撰述された『出三蔵記集』所収の「新集疑經偽撰雜録」は、散逸した「弥勒下教」とともに「仏鉢經」の名をあげ、これに注して「甲申年の大水および月光菩薩の現れる事」とした⁽⁹⁾。ここに言う月光菩薩は薬師如来の眷属としての菩薩ではない⁽¹⁰⁾。弥勒に先立ってこの世に現れ人々を済度する役割を担った月光童子を言う。これは5世紀末以降の弥勒信仰の高揚にもなって、中国撰述經典いわゆる疑經に語られた存在である。6世紀前半に成立した『首羅比丘經』によれば、法滅の時代に月光童子が到来する前に大災害が勃発するという。「月光〔童子〕が現れるそのとき、大災害が起きることは疑いない。洪水が襲い疫病が広まり、多くの民は飢えに苦しむ」とある⁽¹¹⁾。災害の発端はここでも大水である。

このような水害の恐怖と救出への期待は、つとに5世紀成立の道教經典『洞淵神呪經』に表明されていた。そこでは劫の尽きるときに大洪水が襲うと語られ、三洞經の受持が勧められる⁽¹²⁾。同じ場面で『首羅比丘經』に説かれるのは観音經の受持である。そのような救済者としての月光童子像が成立するにあたって、道教經典に登場する真君李弘による救済思想の影響が大きかったことはすでに指摘されており、救済者としての弥勒を語る疑經は末世における救済を説く道教經典に習合したものと考えられている⁽¹³⁾。

5世紀末から6世紀初めに成立した『法滅尽經』によれば、法滅の世になると大水が襲ってきて多くの民が死に絶え、山中に逃れた修行者たちは生きながらえる。そのとき「月光〔童子〕が現れて彼らとあいまみえ、五十二年のあいだともに教えをさかんにする」という⁽¹⁴⁾。これにいくらか遅れて成立した『世變經』でも同じように、月光童子は危機

のさなかに登場し、五十一年のあいだ世にあって人々を教えに導き、仏法を復興したのちに世を去ると語られる。そのあとふたたび仏法は衰退し、やがて天地が大変動を始めたそのとき弥勒が現れるという。「人々が死に絶えようとするとき、大海と湖沼とは混ざりあい、海水は沸き立ち、大地までも沸き立つ。この世界はどこまでも真っ平らに整うであろう。そのとき弥勒が地上に降る」とあった。仏教本来の伝統においては法滅の危機と世界の破局とはまったく結びつかない。にもかかわらず法滅を説く經典に世界の破局についての予言が加わったのである。

6世紀後半の成立と考えられる『普賢菩薩說證明經』(以下『證明經』と略称)において、弥勒はその到来の時期を短縮させ、世界を破局から救う役割を担う。經典が語るところによれば、釈迦の涅槃から七百年後に世界の崩壊が始まるという。天地は震動し疫病が蔓延し、仏法を尊ばない者はことごとく死に絶える。さらに九十九年たつと天地は裂け、七日のあいだ世界は闇に閉ざされる。そのとき羅刹王に率いられた鬼どもが放たれる。「この数え切れないほどの鬼は、黒い衣をまとい赤い縄と赤い棍棒を手にして罪人どもを取り除く」とある⁽¹⁵⁾。

竺法護訳『弥勒下生經』や沮渠京声訳『觀弥勒菩薩上生兜率天經』などの漢訳經典において、弥勒の到来は決して危機的な状況を前提として語られてはいない。そこでは弥勒は遠い未来の平和と繁栄の世に現れ、真理にめざめて人々を教えに導く存在であった。『弥勒下生經』に対応するサンスクリット本においても同様に説かれており、これが弥勒の本来の役割であったと認められる⁽¹⁶⁾。これに対し、5世紀末以降に成立したいくつかの疑經のなかで、弥勒は末世における救済者として登場する。

唐の麟徳元年(664)の道宣撰『大唐内典録』卷十「歷代所出疑偽經論録」は、疑經と判定した經典のなかに「弥勒成仏伏魔經」別名「救度衆生經」の名をあげる⁽¹⁷⁾。天冊万歳元年(695)の明佺等撰『大周刊定衆經目錄』卷十五「偽經目錄」は、「仏說弥勒下生救度苦厄經」や「弥勒下生甄別罪福經」などの名をあげる⁽¹⁸⁾。開元十八年(730)の智昇撰『開元釈教録』卷十八「別録中疑妄乱真録」は、「弥勒下生遣觀世音大勢至勸化衆生捨惡作善寿樂經」など弥勒関係の疑經をあげ、注記に言う。「これはいずれも人を惑わす者どもが偽造したのであり、なかには弥勒が今すぐこの世に現れようとしているなどと説き出すものもある。しかし正統の經典をよくよく見れば、釈迦が亡くなってから五億七千六百万年を経てこの世界の人々の寿命が八万歳になったとき、ようやく弥勒は世に現れると述べてある。我々の寿命が百歳にも満たない今、どうして弥勒が現れることなどあり得ようか」とある⁽¹⁹⁾。この記述からは、『證明經』と同じく弥勒の到来を間近いこととした疑經の存在が知られる。

これらの疑經に語られた弥勒は、遠からぬ未来に世界が危機に陥ったとき、人々を救済する役割を担っていたに違いない。このような弥勒の到来時期の大幅な短縮と末世の救済

者への変貌は何に由来するのか。前述の『洞淵神呪経』には世界が危機を迎えることがくりかえし説かれていた。そこでは真君李弘が救済者として登場する。真君は選ばれた人々を救い出して理想の世界を実現するという。これが5世紀末以降に成立した疑経において弥勒が救済者としての色彩を濃厚に深めていくうえで、なんらかの刺激を与えたことはまちがいない⁽²⁰⁾。もともと道教経典に説かれた世界の危機とは、具体的には一つの時代の終焉つまり王朝の交代を意味した。しかし、そこで描写された世界の破局についての強烈な印象は、王朝交代という本来の文脈からはなれてもなお存続し、やがて疑経における末世の描写とそこからの救済の幻想へと結実したのであった。

六朝時代の末期には、上述のように変質した弥勒信仰が逆に道教経典に影響を与えた場合もある。6世紀末に成立した『太上靈宝老子化胡妙経』において、真君は弥勒とともに世に降ると語られる。「悪しき世を過ぎこして太平の世に至れば、真君に会うことができなう。劫の尽きた後には山も川も岩壁も平らになり、香水で体をすすぐことができる。その後真君は降って来る。弥勒も諸々の聖人もともに降り、世を治め人々を教え導くであろう。太陽と月と星は秩序だつて空に置かれ、あまねく十方を照らす」とある⁽²¹⁾。ここでもなお仏教と道教の救済思想において相互に交渉のあったことが推測される⁽²²⁾。

5～6世紀の中国における世界の危機と救済の思想について、それが成立してゆく過程をたどっていくと、そこには王朝が頻繁に交代する不安定な時代状況が背景として浮かびあがってくる。ここに類似の救済思想が胚胎する共通の土壌があった⁽²³⁾。そのような状況のなかから、仏教の本来の教えにはない救済者としての弥勒が語り出されたのである。それは社会不安や危機感を前提としていた。そして同じような前提の上に、世界の危機を見据え、そこからの救済のあり方を模索するさまざまな思想が、やはり五世紀から六世紀にかけて生起している。やがてそれまでの仏教の立場を根本から批判した三階教が現れ、さらにそれを否定し乗り越えるかたちで浄土教が勃興し、中国仏教における巨大な流れを形成していった。

注

文献略記

大正：大正新修大蔵経、大蔵出版

道蔵：涵芬楼版正統道蔵、藝文印書館

P：パリ国立図書館所蔵ペリオ収集敦煌写本

S：大英図書館所蔵スタイン収集敦煌写本

- (1) 玄奘訳『仏臨涅槃記法住経』によれば、仏涅槃後の最初の百年のあいだ聖法は堅固に保たれ、弟子はみな聡明な智慧があるという。最初の百年間の末年に阿輸迦王^{アッシュカ}があらわれ、仏塔を建立すること八万四千に達し、仏舍利を供養すると語られている。

『仏臨涅槃記法住経』大正 390.12.1113c4-13「我涅槃後第一百年。吾聖教中聖法堅固。我諸弟子聰慧多聞。無畏辯才能伏邪論。具大神力。於諸有情多所饒益。(中略) 一百年末有

大國王。名阿輪迦。出現於世。具大威力王瞻部洲。建卒堵波高廣嚴飾。其數滿足八萬四千。供養吾身所留舍利」

- (2) 求那跋陀羅譯『仏説十二頭陀經』は十二の頭陀行のうち九番目に「塚間住」と十番目に「樹下止」を説いている。止観と無常空観の二つの法を修するには、死屍の腐爛する塚間すなわち墓場で不浄観と九相観を得るのがよく、不浄観と無常観を得てもなお道を得るに至らないとき、樹下で思惟をめぐらすことを勧めている。

『仏説十二頭陀經』大正 783.17.721b12-21「九者若佛在世若滅度後。應修二法。所謂止観無常空観。是佛法初門能令厭離三界。塚間常有悲啼哭聲。(中略)又塚間住。若見死屍臭爛不浄。易得九想観。是離欲初門。是故應受塚間住法。十者行人已作不浄無常等観。得道事辦。若未得道者心則大厭。是故應捨至樹下思惟求道」

- (3) 『法滅尽經』は法滅時のありさまを次のように語る。「[教えが滅びようとするとき]大洪水が突然おそい、とどまることがない。人々はそれを信じず、やがてもとに戻ると思い込んでいる。生あるものは貴いもの卑しいものの別なく、水に溺れ漂い、うろくずに食われてしまう。(中略)そのとき月光童子が世に現れ、彼らとあいまみえ、五十二年間ともに仏の教えを復興させる。まず首楞嚴經と般舟三昧經が世に現れ、やがて消滅する。ついで十二部經が現れ、また消滅する。いずれもはや世に現れることはなく、文字さえも見られなくなる。(中略)その後、数千万年を経て弥勒が世に降り仏陀となるであろう。世界は平和となり、毒気は消え去り、雨が大地を潤し、五穀はおおいに実る。樹木は巨大になり、人の背丈は八丈にも伸び、寿命は八万四千歳となる。救いを得る人々は数知れないほどである」という。ここでも法滅時の大災害からはじまって、月光童子の出世と經典の消滅、後世における弥勒の救済へと至る一連の経過が語られている。

6世紀前半に中国で撰述された『首羅比丘經』には、同じく月光童子が末世にあらわれて大災害で苦しむ人々を救うとある。大洪水が西北から襲い、水の高さは四十里あまりもあって、波はたけり雷鳴がとどろくなか、多くの人が叫び声をあげながら呑みこまれてしまう。そのとき月光童子は大龍王をひきいて人々を導き、波間に浮かぶ山の上に避難させるという。

また、陳の永定二年(558)に南嶽慧思が撰述した『南嶽思大禪師立誓願文』には、九千八百年後の末法の世に「月光菩薩、真丹国に出づ」とある。月光菩薩は『法滅尽經』や『首羅比丘經』にいう月光童子であろう。真丹国は中国のことである。そこで人々に教えを説くという。五十二年後に涅槃に入ったのち、『首楞嚴三昧經』と『般舟三昧經』が最初に消滅し、ほかの經典も徐々に消滅する。『無量寿經』のみは百年のあいだ存続するが、これもやがて消滅して悪しき世が到来する。弥勒が現れるのは五十六億万年を経たのちであるという。この願文は中国の仏教文献のなかで「末法」の語を用いたことで知られるが、ここには『法滅尽經』や『首羅比丘經』が語るのとほとんど同じ月光童子の姿が描かれている。ともに『世變經』と同様に中国撰述の疑經であり、その成立は『法滅尽經』がもっとも早く、『世變經』がこれにつづぐものと考えられる(拙著『神呪經研究—六朝道教における救済思想の形成』研文出版、2009、p.320)。

『法滅尽經』大正 296.12.1119a25-b9「大水忽起。卒至無期。世人不信。故爲有常。衆生雜類。不問豪賤賤。沒溺浮漂。魚鼈食噉。(中略)月光出世。得相遭值。共興吾道。五十二歳。首楞嚴經。般舟三昧。先化滅去。十二部經。尋後復滅。盡不復現。不見文字。(中略)數千萬歳。彌勒當下世間作佛。天下泰平。毒氣消除。雨潤和適。五穀滋茂。樹木長大。人長八丈。皆壽八萬四千歳。衆生得度。不可稱計」

『首羅比丘經』大正 2873.85.1357b19-24「當來之年。必有水災。高於平地四十餘里。當水來時。從西北角出。東南而流。大水揚波。叫聲雷電霹靂。不得爲喻。汝復涌出運波叫聲。當爾之時。人皆惶怖。迫死者多。唯有持戒淨潔。求勲度世。月光童子使大龍王。大引人博著浮山」

『南嶽思大禪師立誓願文』大正 1933.46.786c4-15「入末法過九千八百年後。月光菩薩出眞

丹國。說法大度衆生。滿五十二年入涅槃後。首楞嚴般舟三昧。先滅不現。餘經次第滅。無量壽經。在後得百年住。大度衆生。然後滅去。至大惡世。(中略)如是過五十六億萬歲。必願具足佛道功德見彌勒佛」

- (4) 東晋の義熙十二年(416)に撰述された『高僧法顯伝』は、法顯が師子国(セイロン島)で聞いたという仏鉢の話の伝えている。それによると、釈迦が托鉢に用いた鉢は今ガンダーラにあり、諸国を流伝してインドに戻ったのち兜率天に昇るといふ。弥勒菩薩は天人らとともに香華をささげて供養するが、七日ののちにこの世に降り、海龍王がこれを海中にもたす。仏鉢が消え去れば仏法も次第に滅尽し、それから人の寿命は徐々に短くなって五歳にまで減ってしまう。民は極悪になり、草木を手によればたちまち武器に変わって殺傷しあう。徳のある人々は難を避けて山に逃れるといふ。この話の後段と『世變経』の内容との類似に注目したい。

『高僧法顯伝』大正 2085.51.865c1-15「法顯在此國聞天竺道人。於高座上誦經云。佛鉢本在毘舍離。今在捷陀衛。(中略)若干百年當還中天竺已。當上兜術天上。彌勒菩薩見而歎曰。釋迦文佛鉢至。即共諸天華香供養七日。七日已還閻浮提。海龍王將入龍宮。(中略)鉢去已佛法漸滅。佛法滅後人壽轉短。乃至五歲。五歲之時粳米酥油皆悉化滅。人民極惡捉草木則變成刀杖共相傷殺。其中有福者逃避入山」

- (5) 鳩摩羅什訳『弥勒下生成仏経』では大海の水面が低下して広大な大地が出現すると語られる。このとき「大地の平坦なことは鏡のようで、花々と柔らかい草があまねく大地を覆う」といふ。樹木は三千里もの高さになり、果実がたわわに実る。それは弥勒が出世するときであり、人の寿命は八万四千歳になるとある。これに対応するサンスクリット本『弥勒授記』*Maitreya-vyākaraṇa*には、「大地には棘[のある草]がなく、青々とした草で満ちている。跳ねれば沈み、まるで綿が敷いてあるように柔らかい」とある。ただしここでは大地が平坦になるとは語られていない。サンスクリット本『無量寿経』*Sukhāvativyūha*には、阿弥陀仏の浄土が「あまねく手のひらのように美しく平坦で、さまざまな宝石で満ちている」とある。支婁迦讖訳『無量清浄平等覚経』も、大地が平らに整っていると記す。同様のことは道教經典にも語られており、元始天尊が降る大地は高い所も低い所もなく一樣に真っ平らであるといふ。

『弥勒下生成仏経』大正 454.14.423c14-20「四大海水以漸減少三千由旬。是時間閻浮提地。長十千由旬廣八千由旬。平坦如鏡名華軟草遍覆其地。種種樹木華果茂盛。其樹悉皆高三千里。城邑次比雞飛相及。人壽八萬四千歳。智慧威徳色力具足安隱快樂」

石上善應「ネパール本“*Maitreyavyākaraṇa*”」『藤田宏達博士還暦記念論集 インド哲学と仏教』平楽寺書店、1989、p.298、v.8-10: “akantakā vasumatī samāharitaśādvalā / unnamantī namantī ca mṛdutūlapicūpamā / akṛṣṭotpadyate śālimadhunāś ca / cailavṛkṣā bhāṣiyantī nānāraṅgopāśobhitāḥ / puṣpapatraphalopatā vṛkṣāś ca krośam ucchritāḥ”

Atsuuji Ashikaga (éd.), *Sukhāvativyūha*, Hōzōkan, Kyoto, 1965, p.33, l.16-18: “samantāc ca tad buddhakṣetraṃ samam ramaṇīyam pāṇitalajātam nānāvīdha ratnasamnicitabhūmibhāgam”

『無量清浄平等覚経』卷一、大正 361.12.283a11-13「其國土無有大海水。亦無小海水。無江河洄[恆]水也。亦無山林溪谷。無有幽冥之處。其國七寶地皆平正」

『靈宝無量度人上品妙経』卷一、道藏 1.1.1a9-10「一國地土。山川林木。緬平一等。無復高下。土皆作碧玉。無有異色」

- (6) この記述はさかのぼれば説一切有部所伝の律書『十誦律』に至るであろう。そこには「正法が滅して像法の時代になれば、白衣をまとった[在家の]者は天に生まれ変わるが、出家者のなかに悪しき[六道の]世界に墮ちる者がいるだろう」とある。曇無蘭訳『阿難七夢経』にも同様の記述がある。出家者はねたみあい、はては殺しあう。在家の信者が咎めても忠告を聞かない。「白衣をまとった[在家の]者たちは修行に励み、死後は天に生まれ変わる」といふ。こうした出家と在家の転倒は中国撰述の疑経にも受けつがれている。七寺本『観世音三昧経』の記述が『世變経』に近い。そこには、「そのとき白衣をまっ

た〔在家の〕賢明な者で天に生まれ変わる者は数知れず、教えをうけたまわる者は億万人もいる。男女の出家者たちがいても修行に励むことがない」とある。

『十誦律』卷四十九「毘尼増一之二」大正 1435.23.358c18-19「正法滅像法時。白衣生天。或有出家者。墮惡道中」

『阿難七夢經』大正 494.14.758b17-20「當來比丘懷毒嫉妬。至相殺害。道士斬頭。白衣視之。諫訶不從。死入地獄。白衣精進。死生天上」

『觀世音三昧經』落合俊典編『七寺古逸經典研究叢書』第二卷、大東出版社、1996、p.668「時白衣賢者生天無量。受道萬億。當有出家比丘比丘尼。甚不精進」

- (7) 那連提耶舍訳『大悲經』によれば、仏涅槃後の北インドに富迦羅跋帝という名の王都があるという。その地に暮らす人々のなかには經典の教えにしたがい、安泰な暮らしをいとなむ者もいると語られる。そこでもやはり在家の信者らは兜率天に生まれ変わり。出家者はことごとく地獄に墮ちるとある。

『大悲經』卷二「持正法品」大正 380.12.955a1-9「我滅度後北天竺國。當有王都名富迦羅跋帝。人民熾盛豐樂安隱。彼處多有諸婆羅門長者居士。隨順修多羅。深信於我及諸聲聞。供養恭敬尊重讚歎。(中略)彼富迦羅跋帝王都。所有在家諸白衣等。彼命終已生兜率天。諸出家者悉墮地獄」

- (8) この記述はさかのぼれば曇無讖訳『大般涅槃經』に至るであろう。そこには「もろもろの悪しき僧侶らは私の教えにたがい、禁じられた戒律をしきりに犯す。不浄の物を受けとり、利得をむさぼり求める。もろもろの白衣の〔在家の〕者に向かって、自分たちは煩惱のない境地を得たとみざから讚歎する」とある。竺法護訳『当來變經』は仏陀の教えを損ねる悪行を二点あげている。第一に戒律を守らない者がおり、心を正さず智慧を修めず、妻子を養い財産をもうけるという。第二に徒党を組む者がおり、「教えをたてまつる者を憎み、墮落させようとし、言辞をなしてごびへつらい、内面では悪行を犯しながら、外面では清廉潔白を装う」という。この記述が『世變經』に近かろう。こうした現状を反映するかのよう、『魏書』「釈老志」は神亀元年(518)の仏教教団肅清の奏上を伝えている。中国全土の僧侶のなかには、心も行ないも清らかな者もいるが、かたや法衣をまといながら道義にもとる行ないをする者が少なくない。清濁を厳しく弁別すべきであるという。

『大般涅槃經』卷二十五「光明遍照高貴徳王菩薩品」大正 374.12.513c26-28「諸惡比丘違反我教多犯禁戒。受不淨物貪求利養。向諸白衣而讚歎我無漏」

『当來變經』大正 395.12.1118a16-20「佛告比丘。復有二事令法毀滅。何謂爲二。一不護禁戒。不攝其心不修智慧。蓄妻養子放心恣意。賈作治生〔産〕。以共相〔共相〕活。二伴黨相著。憎奉法者欲令陷〔墜〕墮。故爲言義〔儀〕謂之諛〔論〕諂。内〔私〕犯惡行。外佯〔揚〕清白。是爲二事。令法毀滅」

『魏書』卷百十四「釈老志」中華書局二十四史点校本、pp.3045-46「〔任城王澄奏曰〕天下州鎮僧寺亦然。(中略)或有栖心眞趣。道業清遠者。或外假法服。内懷悖徳者。如此之徒。宜辨涇渭」

- (9) 『出三藏記集』卷五「新集疑經偽撰雜録」大正 2145.55.39a15-17「觀月光菩薩記一卷。或有經字。佛鉢經一卷。或云佛鉢記。甲申年大水及月光菩薩出。彌勒下教一卷。在鉢記後」

開元十八年(730)智昇撰『開元釈教録』によれば、中国撰述の疑經のなかに甲申年の大洪水を説いたものが存在したという。ただしその内容は『出三藏記集』所載のものとは異なると注してある。『開元釈教録』卷十八「別録中偽妄乱眞録」大正 2154.55.673a4「甲申年洪災大水經一卷。與佛鉢記中甲申年水事不同」

- (10) Paul Magnin, *La vie et l'œuvre de Huisi: Les origines de la secte bouddhique chinoise du Tiantai*, École française d'Extrême-Orient, Paris 1979, p.206, n.52.
- (11) 『首羅比丘經』北京圖書館敦煌遺書 8274.22「月光臨出。大災將至。無有疑也。當來大水災至。兼有疾病流行。百姓飢饉」
- (12) 『洞淵神呪經』卷九「逐鬼品」道藏 335.IX.3a1-3「道言。自今大水來近。人有知者。奉受三

- 洞。男女信法。一心行道之者。我當遣三天玉女十萬人來下護之」
- (13) Александр Степанович Мартынов, «Буддизм и двор в начале династии Тан», Лев Петрович Делюсин (ред.), *Буддизм и государство на Дальнем Востоке*, Институт Востоковедения Ленинградское Отделение, Москва, 1987, стр.97.
- (14) 注(3) 参照。
- (15) 『普賢菩薩說証明經』 P.2186.146 「此鬼神恆河沙數。黑衣服赤繩赤棒。療〔療〕除罪人」
- (16) Sylvain Lévi, “Maitreya le consolateur”, *Études d’orientalisme publiées par le Musée Guimet à la mémoire de Raymonde Linossier*, II, Librairie Ernest Leroux, Paris 1932, pp.384-390; Prabhas Chandra Majumdar, “Ārya Maitreya vyākaraṇam”, Nalinaksha Dutt (ed.), *Gilgit Manuscripts*, IV, Bibliotheca Indo-Buddhica, XXIV, Sri Satguru Publishers, Calcutta 1959, pp.195-214; 石上善應、前掲論文、pp.296-309.
- (17) 『大唐内典録』卷十「歷代所出疑偽經論録」大正 2149.55.334c4 「彌勒成佛伏魔經。一云救度衆生經」
- (18) 『大周刊定衆經目錄』卷十五「偽經目錄」大正 2153.55.473a21 「大契經一部四卷。一名彌勒下生結大善契經或三卷」、474a12 「佛說彌勒下生救度苦厄經一卷」、474b2 「勇意菩薩將僧忍見彌勒并示地獄經」、474b20 「彌勒下生甄別罪福經一卷」
- (19) 『開元釈教録』卷十八「別録中疑妄乱真録」大正 2154.55.672c15 「彌勒下生遣觀世音大勢至勸化衆生捨惡作善壽樂經一卷」、672c19-21 「隨身本宮彌勒成佛經一卷。賢樹菩薩問佛品。金剛密要論經一卷。亦名方明王緣起經。或無論字兼說彌勒下生事十四紙」、672c22-24 「並是妖徒偽造。其中說彌勒如來即欲下生等事。謹案正經。從釋迦滅後。人間經五十七俱眠六十百千歲。瞻部州人壽增八萬。彌勒如來方始出世。豈可壽年減百而有彌勒下生耳」
- (20) 拙著『神呪經研究』前掲書、p.324。以下の書評も参照されたい。Dominic Steavu, “Comptes rendus: Kikuchi Noritaka, *Shinjukyō kenkyū*”, *Cahiers d’Extrême-Asie*, XVII, École française d’Extrême-Orient, 2008, p.349.
- (21) 『太上靈宝老子化胡妙經』S.2081.122-125 「過度惡世。得見太平與眞君相值。末劫之後。山河石壁無有高下。香水洗身。然後眞君來下及彌勒衆聖。治化更正。日月星辰。列布在空中。普照十方」
- (22) Anna Seidel, “Le Sūtra merveilleux du Ling-pao Suprême, traitant de Lao tseu qui convertit les barbares (le manuscrit S.2081)”, Michel Soymié (éd.), *Contributions aux études de Touen-houang*, III, École française d’Extrême-Orient, 1984, p.311.
- (23) 5～6世紀の中国における世界の危機と救済の思想について、筆者は比較宗教史の視点から考察を試みた。Kikuchi Noritaka, “Essai comparatif sur la pensée eschatologique en Chine médiévale”, XXXVI^e *Congrès international des études asiatiques et nord-africaines*, Université de Montréal, 2000, p.125.

キーワード：北魏 疑經 敦煌写本 弥勒 『般泥洹後比丘世變經』